

昭和二十二年七月二十三日第
三種郵便物認可
行(毎月一回・十五日発行)

(通第三三三号)

慈光

次 目

慈光の照耀	近角常観	(1)
自然法爾のこと	臼杵祖山	(4)
教育の姿	福島政雄	(6)
福島先生の一年忌に	山田宰	(11)
一道会の記	山田	(11)
感念佛詩抄	榎原徳草	(15)
隨感断片	木村無相	(18)
		(21)

第二十九卷

第二号

慈光の照耀

近角常観

われらは暫くも親様の慈光を忘れてはならぬ、私は慈光

を忘れて居るときは、あたかも魚が水を離れたようなものじや。自分ながら怪しむほどにひややかに且つ寂しくなってしまう。

こうなつた時、如何程喜ぼうと試みても、試みれば試みるほど喜べなくなつて、心中あたかも水の涸れた池の様な氣持がする。こうなると所謂、魚を陸にあげたようである。我等は御慈悲の水を離れたら身体はあつても死んだも同様である。はずかしいことながら私は今でも折々この様なことがある。

つくづく思うと、何事か出来事のあつたときはかえって喜びが溢れてくる。事のない時は、かえってお慈悲を離れは照らして下さる。

めにも一点の私を加えることはできぬ。
光線の反射でひかっている鉄の様なもので、それ自身はいつふりかえつても黒金である。われらはいつふりかえつて見ても罪の魂りの外はない。しかるにありがたいことは、またいつでも慈光の日輪は照らして下さる。

慈光を離れているというは、日光の雲霧におおわれてある時である。されど雲霧の下明らかにして聞なきが如くである。どんよりとしているが、たしかである。親のふところに抱かれながら泣きやまぬ子供の様である。泣きだしたときには泣き止みたいと思うても止められぬ様なもので、よろこびたいとくわだてもよろこべぬ。

しかし親様は、いつの間にか向うから照らして下さる。慈光はるかにかぶらしめ 光のいたるところには 法喜をうとぞのべたまう 大安慰を帰命せよ

いつの間にか夕立の雲が夕陽に破られたようなものである、雨後の青山のように一層はれればとお慈悲が嬉しくいだける。

必ず無上淨信の曉に至りぬれば

三有生死の雲晴れて

清淨無碍の光耀ほがらかにして

一如法界の真身あらわる

やすいのである。

講話の時にうれしくないことはないが、筆をとるときには、とても書けないことがある。そういうときには書かぬこととする、書きたくても書けぬ。

過去五年間の「求道誌」を反覆して、皆さんの告白を読ましていくだと、じきく親様に遇わして貰う心持がいだします。

どなたの告白にも、御縁のある限りは、私がお話申したことが書いてあるが、事実それにちがいないが、こればかりはいかな名利の心でも、とても自分の力ということは毫厘もない。

ないはずである、現にその力が我にあるかとぶりかえるときは、我々は何ものである。何もないものがかりそ

いかにも、何とも云えぬ日本晴の空である。

しかしその様なことは暫時である。はや他の空に雲があらわれてくる。われらはとかく晴れたがつてこまる。晴雨を論ぜず照らして下さる日輪がありがたい。

煩惱を断ぜずして、涅槃を得るなり

と聞きながら、煩惱を断じて涅槃を得たい気になつて苦しんで居る。衆生貪瞋煩惱中を忘れて、能く清淨願往生心だけを欲しがる。

淤泥華となるからは、泥の中から開くのがあたりまえである、高原の陸地に蓮華を生じたいと云う考えが、そもそも間違つている。

人生の意義というようなことでも、一点の穢れなき清淨無垢の人生を実現することを理想とするものゆえ、百年たつても出来るものでない。

出来ぬことを出かそとするのが迷いじや、出来ぬもの

を出来ぬと知れたがお慈悲じや。
かく言えばとて、煩惱をよいとは云わぬが、そのよくない煩惱をあわれみたまうお慈悲が有難い。

「あきないをもし、奉公をもし、猶すなどりもせよ。かかるあさましき罪業にのみ朝夕まどいぬる我等ごときのいたずらもの」

というこころはしばらくも忘れてはならぬ。

全く煩惱なき人生が此世で出来るものなれば極楽はいらぬはずじや。

罪けしてたすけたまわんとも、罪消さずしてたすけたまわんとも、そは如來にまかせたてまつるの外はない。罪のあるなしの沙汰をせんよりは、信心をとりたるか、とらざるかを沙汰せよとの仰せをいただかねばならぬ。いかに煩惱はあつても、信ばかりは遠慮なくいだかして貰うのじや。否煩惱はありともではお慈悲のいただきようがかるい。煩惱のものなればこそ、信の外はないのである。つい前に申した和讃に

五濁悪世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて
ながく生死をすてはてて 自然の淨土にいたるなれ
右へも左へも動けぬ御教化じや。

次の和讃もありがたい、

金剛堅固の信心の

さだまるときをまちえてぞ

弥陀の心光照護して

ながく生死をへだてける

親様が、われらの気がつくのを待つていて下さるのである。しかしによく、求道の人は、お慈悲が来て下さるのを待つて居る心持じや。それは大間違いじや、親様を待たせておきながら、自分が待つて居る心持がそもそも間違いであ

自然法爾のこと

臼杵祖山

仏智の不思議は、仏智の不思議によつて、仏智不思議なりと信ぜしめられる。

念仏は如來がわれらに廻向される無限の大悲である。
信じてたすかるのでない。信じ得ないものをかねてしろ
しめされての本願である。

淨土を願つて仏法を聞くけれど、それはまだ身の程を知らぬ人である。一分一厘、宿業に支配される身は、その宿業の結果は、地獄であれ、畜生であれ、餓鬼であれ、それを行くばかりである。

但し、太陽があるところに闇がないように、この全体をしろしめして、ことにあわれんで下さる仏ましませば、三途の黒闇はひらかれる。

恵みによつて、恵みをうける。

「唯うらむらくは衆生、疑うまじきことを疑うことを、淨土対面して相さからわず、弥陀の摂と不摂とを論ずることなれば、唯専心にして廻ると廻せざるにあり」
たすけて下さるであろうか、またたすからぬであろうか
その様なことは一切如來にまかせて、十劫以來おまち下さつた御恩を知らずにいた心をひるがえして、お慈悲を頂くの外はない。

「一向專修の人においては廻心といふことただひとたびあるべし。その廻心とは、ひごろ本願他力真宗を知らざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、ひごろのこころにては往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて本願をたのみまいらするをこそ廻心とは申し候」
待ちかねてうらむとつけよみんな人に
いつをいつとて いそがざるらん
親心には一時も休みがない
観音勢至もろともに 慈光世界を照耀し
有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり
正月の三日に子供が急病にかかりました。お慈悲によりてすぐ本復させて頂きました。かえつてよくなつてから筆がとれないで非常におくれて申わけがござりませぬ、皆様がどの様に待つて下さりましたでしよう。

南無阿彌陀仏

「南山の鼓、北山の舞」という。「阿」「吽」の呼吸はこんなところか。

理性と事相

真理といえば信じ、弥陀仏と云えば信じられぬと云うがおかしなことである。
眞実はかららず顕現する、顕現しない眞実は虚名である、枯死せるものである。その顕現するものがあつて眞実

も知らされる。

眞水と流酸水とをならべると、一寸見たところ区別はつかないが、それの働きにおいて別がある、またその働きによって見分けられるのである。

○

信心は決して条件ではなく、本体を嘗めることであり、^な称名は決して要求ではなくして実質を味わうことである。

この信嘗（しんしよう）、道味が生命道である。

○

孝行せよとは、不孝をしているからである。孝行している者に孝行せよは無用である。

信ぜよとは、不信であるわれらをみそなわしてのお勧めである。故に、この仰せによつて不信の身を自照せしめられるのである。

然し、孝行していると自認して不孝をしている者多し、猛反省すべきことである。

信するまでもなき仏凡一体なれば、信ぜざるを得ぬのである、同時同処の信嘗である。

○

元来「門」というものは、立ち塞がつて居るところでなくして、通り抜けるべきものである。通り抜けて用なきまでに達しなければならぬ。

教 育 の 姿

福 島 政 雄

「親鸞は弟子一人もたず候」これが歎異抄の第六章の中心ともなるきわだつて鮮かな言葉であります。これは聖人が御弟子をも御同行と仰せられるお心持のあらわれでありまして、聖人の謙虚なおこころのあらわれであるとうけたまわっています。

このお言葉に対しても私は自分自身を省みずには居られないのであります。私は教育界にいますことがもはや四十年近くになりますが、その間にご縁があつて私が教えたといふわゆる教え子の数は随分に多いのであります。その私は「弟子一人もたず」というような謙虚な心を持つてゐるかというと、まるでその反対でありまして、自分は四十年近い教育生活の間に相当地生徒を教え、色々親しむような機会をあたえ、自分の家庭までも開放して学生生徒に接觸する機会を多くし、愛してこれを導いたつもりである。然

「常没の衆生をさきとして、善人におよぶまで、一衆生のうえにもおよばざるところあらば、大悲の願は満足すべからず。面々衆生の機ごとに願行成就せしとき、私は正覺を成じ、凡夫は往生せしなり」

△安心決定鈔△

これ私一人にとって、面々とは、心の面の一つ一つにと
いうことの思召しではあるまいか。夙夜十二時におこる無
量一切の心の一つ一つの上に、願行成就して正覺を円満し
たまうた尊さである。

かたちましまさぬ、無相の故に、面々に成就したまうなり、あらゆる相を現したまうなり。

○

「心得たと思うは心得ぬなり」（蓮如上人御一代聞書）

真実に心得たということは、心得ぬること、即ち心得おわりて、心得たという心根を持たぬことである。心得おわりて、心得たという思いを持たぬことが真実に心得たる味わいである。

頭痛がすると頭を感じ、歯痛があると歯を感じるが平素無事の時は、その思いも要なしである。

（註）真実の親子には、親じや、子じやの思いも無用、それが要るのは、義理の親子のあいだである。

るに今となつて見ると、それらの当時の学生生徒が今では教育界に極要の地位を占めている者も多くあるのに存外自分に對して冷淡である。こんなつもりではなかつたといふように、何だか愚痴が私の腹の底に流れています。これが私の根本の貪欲の煩惱であります、貪欲が満されないから愚痴になつてゐるのであります。

或は特に親しくした学生などで、卒業後まで親しい関係を続けていたのが、何かのことであつて離れて行つてしまつて、寄せつかなくなりますと、私はひどく淋しがりまして、その当人を悪く思つのであります。実は分離の原因が自分にあるのだけれども、なかなかそうは思いません。先方が悪い悪いと思うのであります。その心がたかぶつて参りますと、教育界ほど淋しい世界はない、これは正に生命の分離の世界であるなどと考へたものであります。かようにして私は教育という世界に失望していたのであります。

然るにこの私に「親鸞は弟子一人ももたず」というお言葉がひびいてきたのであります。正に晴天の霹靂(へきれき)とでもいうような感じであります。私はあれも自分の弟子だ、これも自分の弟子だ、弟子相当のことはつくしてくればうなものだというようなことを考へてゐる、そこに「親鸞は弟子一人ももたず」というお言葉がひびいてきました。私はびっくりせざるを得なかつたのであります。そこで私は弟子に対する自分の執着ということを反省させられるようになりました。

あれもこれも自分の弟子だとえらそなことを考へてゐるが、一体自分はその弟子に何を与えてゐるのか、学問を与えてゐるのか、信仰を与えてゐるのか、又は人格の感化というようなことがあるのか、かように考へて参りますれば、どれもないということになります。

学問はいつも申しますように独り善がりの学問であります。そんな学問に誰もついて来る者はありません。信仰は駄目であります。人格の感化など零(ぜろ)であります。信仰については、たとい私に信仰というものがあつても、信仰の教育など出来ることではありません。私はベルリンにいました時、シュライエルマッヘルの宗教論を読んで感じたのであります。宗教的信仰の上では「人生手放し」の

くるということはない、師匠は弟子を発見して選び出すのであると云っています。これを仏教の言葉で申しますれば不思議のご縁で師弟が値遇(ちぐう)するのであります。信心の教育というようなことはありません。不思議の御縁で師匠と弟子との間に、仏と仏とが出会いたまうのであります。これを大無量寿經には仏仏相念(ぶつぶつそうねん)と云われてあります。祖師聖人が法然上人におあいになつて、熱心に百日もお通いになり遂にご信心が開けたというのも、お二人の間に不思議の仏仏相念が行われたのであります。その開けるのは機縁というものであります。法然上人は、親鸞の信心を開いてやつたなどと思つておいでにならないのであります。親鸞聖人の方からは法然上人とのご縁を深くよろこばれていますが、しかし信心は「親鸞一人がためなりけり」の世界であつて第二章にあります通り、法然上人に信頼しながらも信仰の上では「人生手放し」の心持で「地獄は一定すみかぞかし」と告白せられていました。法然上人に対する心を離れて、ご自分の境地をはつきりと述べられてあります。そこに法然上人とひびきあう世界が開かれています。これが宗教的の師弟関係であります。祖師聖人はここをご自覚になるところから「親鸞は弟子一人ももたず候」と仰せられるのであります。

かような次第でありますから、私など今日の稀薄な器械的な教育界に自分の身をおいて、教え子に何の役にも立つていられない身でありながら、あれもこれも自分の教え子だと考へてゐるのがそもそも傲慢なことであります。それかといつて聖人の口まねをして教え子をいきなり御同行などと呼んだならば、なおさらきざになります。しかし今日の学校でも、一つの学校で仮りにも教える身となつて幾人の学生生徒を導いたというのは、実は浅からぬ因縁であつて、教育者としてはその因縁をよろこぶべきものだと思います。そしてその教え子が自分から離れて行つたり、反抗するようになつたりしたならば、それは淋しく悲しいことに相違ないのでありますけれども、それには必ず自分に原因がありますから、私は自分の根本問題にかえりたいと思います。そして「つくべき縁あらばともない、はなるべき縁あれば、はなることのある」と聖人が仰せられるお言葉をよく味わいたいと思います。

そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念佛をもうさせ候わばこそ、弟子にても候わめ、たとえに弥陀の御もよおしにあずかりて念佛申し候うひとを、わが弟子と申すこと、きわめたる荒涼(こうりょう)のことなり。つくべき縁あればともない、はなるべき縁あればはなる

ことのあるをも、師をそむきて、ひとつにれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなどいふこと、不可説なり。如來よりたまわりたる信心をわがものがおにとりかえさんともうすにや、かえすがえすもあるへからざることなり。自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと。云々。
弟子を奪い合うということは当時の佛教界にも大いにあつたようでありますし、今日の学校教育においてもあります、いかにもさもしいことであります。私にもそんな心が無いとは云えません。自分に親しんでいた教え子が自分から離れて他の人につくようになつたりしますと、淋しいといふ言葉では云いつくされぬ心の打撃を感じます。そんなことが続きますと、この人生というものを全く味気なく感じ、教育界などを去ろうという心持にもなります。これは執着あるが故に去ろうと思つたりするので、心が顛倒しているのであります。「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あればはなる」というのは、この人生に対する聖人の諦観(たいかん)であります。人生はこのようなものであると、あきらかに観せられたすがたであります。私もこの諦観に入らねば落着いて生活することは出来ないのであります。

その諦観は如來を中心としたまうところから出て來るのであります。

であります。人間と人間との五分五分の争いならば、いつまでも続きます。元来師弟関係が出来てくるというのも、如來より賜わりたる信心の人を発見したところから出てきたのである、根源は仏陀にある。自分の力では何事も出来るものではない、弟子と思っていたものが自分にそむいて離れて行くのも、さようの因縁があるのであって、自分の力でどうともなるものではない。すべての人々は如來のお弟子であり、自分は相弟子であるのに過ぎない。然るに自分が高あがりして師匠などと思っているから淋しいなどと思うようになるのである。如来にかえれ、如來の御心のままにという心境に任せよ、これが聖人の仰せられようとするところであります。すべては「仏天の御はからい」であるというお言葉が聖人の晩年の手紙の中に出ています、悠々としてこの人生を歩みたまう聖人のおすがたが見えるようであります。

最後に「自然のことわりにあいかなわば仏恩をも知り、また師の恩をもしるべきなり」というお言葉は意味が深いとおもいます。自然というのは、聖人の御解釈では、わがはからわざるを自然といふのであります。教育だ、教師だ、生徒だ、師の恩を知れなどと騒いでいるのは、みんな無理なはからいをしているのであります。恩を知れと云わ

れてわかるような恩ならば、それは相対五分五分の売買の惠与というようなもので、これだけの恩に対してもだけを返せば宜いというようなものであります。自然というのは、恩を施したのではないであります。自然というのは、恩を施したとも恩を受けたとも思わない境地であります。教師だ、生徒だということも忘れて、共々に仏陀を仰いでいるというようなこともあります。すべて自分のはからいというものが無くなつて、最も無理のない生活をしているという有様を自然と申されるのであります。

その自然のことわりにあいかなわば仏恩をもしり師の恩をもするべきなりと申されるのは、不自然な利害の打算を離れよということでありましよう。資格をとるとか、知識を授けるとか言つて利害の打算をしているのが今日の学校というものでありますで、私もその中にいて打算を行つてゐる一人であります。あれほど熱心に教えたから少しは感じてくれそなものだと考へるのも打算であります。しかも私は始終こんなことばかり考えています。これでは師の恩を知る者が私の前に現われないので当然であります。教育するという私の心が不純で渋つてゐるのであります。

こんな境地をぬけて私は如來の御恩を仰ぐべきであります。一つの学校において假りにも師弟という名の下に、共

共に道を求めて行く道づれを得たということは有難いこと

である。自分は次第に年をとつて行くが、若い学生達の力にひかれてなお勉学を続け、人の道を求めて行くことが出来る、これは教育の世界でなければ味わわれない有難いことである。自分はかえつて教え子を自分の求道上の善知識ともおもう。これは教え子に感謝しなければならぬことであるが、こう云う因縁の開かれたにつけてもまず如來の御恩をおもう。如來への御礼とて何も出来ないけれどもただ念仏申すばかりである。こんな心境がひらけて参りますときには私の心はただ仰いで如來を信ずるばかりとなります。

かようには「人生手ばなし」になつて参りますと教え子が

どうのこうのということが問題にならなくなります。「弟子一人ももたず候」であります。すると不思議にも教え子

の心がまた転じてきます。教師の上に不思議のものを感じてここに教師を先生と仰ぎその恩を感じるようになります。それは教師を縁として感ずる仏恩であり、相対売買のものでなく絶対のものであります。教え子の方でも先生を

五分五分の相手とせずしてただ人生の有難さを感じるようになります。それが自然の無理のない境地であり、そこに教育の真のすがたがあると私は考えますのであります。

(歎異抄身読記より)

秀在師のことば

近角先生のことば

氷塊を毛布で包むが如き信心になると、氷は何時までもとけないままになり勝である。

これでは悪人救済でなく、悪人許容である。



池山先生のことば

世の中に火災保険安心というのがある。何事もない時はそれで安心しておられるが、いざ火事となると、あれだけは、これもほつておけないとなる。

これではいざという時の間にあわない。



今まで底のない慈悲に底をわが方から入れていたのがあやまりであった。ああ浅間しいことよ、今こそそれがあきらかに知らされました。

また云く。

お慈悲の水の流れは清くして、タブタブしているけれども、こちらから聞こえたという大きな土手をつくつておるから、お教化の水が流れこまない。

福島先生の一年忌にあたつて

山田宰

福島先生がお亡くなりになつて一年になるについて、先生の御生前の深い御慈愛のお言葉が、いよいよ耳の底に思ひ起されてくるこの頃である。

先生については御著書を通してお名前は存じ上げていたが、親しくお導き頂くようになつたのは多分昭和二十五年頃からで、花田先生の御紹介によるものであつた。先生が花田先生のお宅の一一道会で御講話をなさるときは、花田先生は必ず私に福島先生に近づく機会を与えて下さつた。

当時の私にとってどうしても納得がいかないことが一つあつた。それはどうも真宗は自分の悪を余りにも前面に出し過ぎるのではないかということであつた。「自分にはこういう悪いところがある。ああいう悪い点がある。この悪いところ目当のお慈悲」というけれども、どうして悪から

ドイツ留学にあたつて福島先生は非常に喜んで下さるとともに、大変な宿題を私に頂いたのであつた。「ドイツ人は親鸞聖人の信仰が分る民族である。ドイツ人にこの教を分らせれば、もっとキリスト教の信仰を徹底させることができ」^ロ というようなことを仰言つたように思う。そして私は、近角先生の「信仰の余瀝」を下さつて、これをドイツ語に翻訳して来なさいといわれて、参考のために、宇佐美という方が一九二五年ベルリンで出版された大經の一部（四十八願など）を訳した本を下され、また中に御名号の書かれた小さな御厨子を下さつた。花田先生からは、

行けの声、来れの仰せかしこみて

今日立たんとす 万里の波涛

というお歌を頂き、また池山栄吉先生の独訳歎異抄を御心配頂いた。

ドイツへ行つてからの私は専門とする自然科学の研究を進める傍、どうやつて福島先生の宿題をやり遂げたらよいのか、そのことがいつも心にかかつてゐた。花田先生からドイツの仏教関係者の情報をお知らせ頂いて、當時東ベルリンの大学図書館の東洋部門の長をしておられたオースターリーさんを訪れたり、もうお亡くなりになつた自由大学の教授エツカルトさんをお訪ねしてみたりした。ベルリンのフ

抜け出そうという努力をしないのであらうか。私とて人間が悪の塊のようなものではあることは充分知つてゐるつもりである。しかし善なるものの認識、その認識に伴う善なるものの努力、言わばゲエテの説くファウスト的人間こそあるべき姿ではないかというようなことに迷つてゐた時であつたので、福島先生の御講話には大変感じさせられるとともに、何か反撥するものもまた心のどこかにあつたのである。福島先生はその辺をするどく御覽になつておられたようだ。先生は私の疑問に対しても直接触れられず、大変暖いお心で何かと目をかけて下さつた。花田先生や福島先生にこのようなことでいろいろお導きを頂いたのは昭和二十八年までであつて、その年の九月に私はドイツへ旅立つた。

ルナウに仏教のお寺があつて、五月の花まつりが行われた時、ピーバーさんにお会いすることができた。これを機会に独訳した信仰の余瀬と独訳歎異抄の紹介をピーバーさんとのところで行うことになり、いくらかでも訳の内容についてドイツ人の反応を知ることができるようになった。一応の翻訳ができるがつたところで、福島先生に御報告するとともに、題名の余瀬の独訳がどうも旨く行かないと申し上げると、本名を “Perlen des Glaubens”（信仰の珠玉）としてはどうかと言われ、独文でその序文を書いて下さつた。

ところが、それに続いて先生からもう一つ宿題を頂くことになつてしまつた。先生の御著書「近代思想と信仰」の部分をついでに独訳してみてはどうかというお言葉で、これは大変なことになつたというのがその時の偽らない私の実感であった。考へてみれば私のような自然科学を専攻する者に、このような仕事を言いつけられ、お許しになると、いうこと自体、普通の考え方をされない先生の一面を示しているようだ。

先生の御著書は学問的表現の好きなドイツ人には親しみ易い論理展開であるとともに、信仰の上でもその核心をついた内容のもので、フライブルクのカトリック系のカール

アルバー社がその出版を引き受けてくれた。しかしカトリックについて原著で述べてある点を相当削除したり修正したりすることを要求され、先生は可成り御不満ではあったが出版社の要求を入れ “Die Freit und der Glaube” という題で、副題を “Der innere Friede im Buddhismus” (仏教における内的自由に就いて) として一九五六年、立派な装丁で出版になった。その時、哲学雑誌や新聞に書評が相当沢山掲載され、その大部分は出版社から私宛と先生宛に送られて来ており、その内容は、こういう本をドイツ人が如何に受けとるかという点で大変興味深い。先生も一度書評を全部整理してみたいと仰言つておられたようだ。

大変好意的な書評が多いにもかかわらず、この本の売れ行きは決してよいものではなく、現在はもう絶版となつていて手に入れることができない。また信仰の余瀝はついにその出版を引き受けてくれるところを見つけることができず、先生の手書きの序文とともに原稿は未だ私の手許に眠つたままになつていて。

現在ベルリンのピーバーさんを中心に、ヨーロッパにおいて真宗教団がささやかな活動を続いているが、もし福島先生のあの宿題がなかつたら、私がピーバーさんにお会いする機会もなかつたことは確かである。池山先生、福島先生のお念力が今日をあらしめたものであることをつくづく

老のこころを仏しろしめす

など、私にとつてまことに身に浸みるお歌である。

昭和四十八年頃からお身体が弱られたようだ。私が長年さまよい歩いた善惡問題に一区切りつける意味で、余りよい題ではないが「善人の救われる道」を先生に御覧に入れたのは未だお元気のうちであったようだ。先生を最後にお訪ね申し上げたのは昭和四十九年の十月であった。その時先生はもうお別れを意識されたお言葉をときどきはされ、私が否定するような言葉を申し上げても、それはただ空（うつろ）に響くばかりであった。辞去すると、謡曲の“鉢の木”的一節をお聞かせ下さった。私はまだお目にかかる機会があるような気がいても、先生はこの世のお別れのつもりでお説い下さっていたに違いない。そしてドイツに留学された時、チユーリッヒで買われて大切にされていたペスタロッチの “Nachjorshungen” (人類発展における自然の道行きについての余の探究) を下さつた。その時先生の書棚の蔵書は多くの人々に頒けられてすっかり少くなつていた。

お別れして一年、今はただただ浄土からの先生のお導きをいたくばかりである。

(完)

と感じさせられる次第である。

私はその後、ベルリンに二ヶ年滞在し、帰国して名大につとめ、次にフランスのグレノーブルに行き、一旦は帰つたけれど、再び招かれて渡つたが、昭和四十七年ヨーロッパから帰国して奇しくも岡山で働くことになった。その時先生から頂いたお手紙の一節を次に掲げさせて頂こうと思う。

御書信繰返し拝見いたしました。六年ぶりの御帰朝で日本の有様の変つているのに御驚きもあり、御悲しみもありますでしよう。国民が米国化している有様まことに悲しむべきことあります。マッカーサーが日本の家族制度を破壊し、国民党は日本人としての自覚がなくなつて居ります。何とも言えませぬ。私は八十三になつてとてもする力がありません。北里大学では一週に一回、教育原理の講義をして居ります。

先生の御慈愛こもるお言葉は何時のお手紙のはしはしにもうかがわれ、特に私共の子供（外地で育つた）の国語の教育について大変に御心配を頂いていた。和歌も沢山いただいた。

老の坂、たどりゆく身は法の友を

恋ふる心のしみじみと湧く
國をおもひ子等をおもひて辿り行く

コペルニツクスの転回

星が移り、太陽が廻るのだと、空ばかり見つめていた人達に、彼等の立つてゐるこの大地が、最も確かだと思いつついた大地が、廻転していると聞かされた時どんなにか驚きと恐れが襲つたことであろう。

人の死を悲しみ、人の病をいたんだ自己が、やがて悲まるべき、いたまるべき身であると知らされた時、人の愚を笑い、人の罪を責めた自己が、やがて笑わるべき、責めらるべき身であることに気付かされた時、そこから眞実の求道の旅がはじまる。そのまんまが眼には見えないが大きなみ心に動かされ、護られての旅である

大乗非仏説について

大乗經典は仏滅後何百年にして成立したもので非仏説であると云う。仏陀が直接書かれたものでないことは事実であるが、後に出来たからと云つて、仏陀の心でないとは云えない。譬えば、親の膝元に居る時よりも、遠く家郷を離れて親を思い、更に生存中よりも亡くなつたあとに親の心は子に深く広く身にしみてくるものである。そしてこれで親は分つたといえるものではなく、種々の経験をへて、段々分りはじめるのである。仏陀のご本意も御在世中よりもむしろ御滅後にいよ／＼輝きはじめ、そこに大乗經典が眞

一 道 会 の 記

榊 原 德 草

今年の一一道会は十月三十一日（日）となつた。池山先生の御命日は十一月八日だが、それに近い日を選んで開催するのが慣例となつた。十一月三日の文化の日も休日だが、各種の学会等があるので、先生の第三十九回の追憶の日は三十一日となつた。こんな最後の日曜は珍らしいので問合せがあつたりした。

然し当日は故羽浅了諦先生未亡人の米寿の賀宴のため向島諦宣師は欠席、又先生門下の諸先生も一道会には遅参し早退する旨の返信があつて、今年の会が心配になつたので私は池山先生著「仏と人」や追悼録「呼子鳥」から時間の間埋めの用意に、長短各種の文章に紙片を挟んで拝読する準備をした。

又収集の方も開始時間には少數であったが、読経を終り歎異抄拝読を終ると七八十人の方々が客殿に満ちていた。又先生方も、毎年お来会下さる花田、川畑、西元の諸先生

信の者にあつては、「信」も「不信」も「疑い」も「計らい」も、そうしたことをする能力は全然なくて、全く信、不信、疑惑、はからい以前の全く無信の者であります。

そのものに、

「よろずの善の中より、名号をえらびとりて、あたえた

まうなり」

でございました。ナムアミダブツ、々々

出来ました。念仏詩一つ

無信の者に

親鸞聖人

唯信鈔文意に

「仰迦如來

よろずの善の中より
名号をえらびとりて

五浊惡時、惡世界

惡衆生、邪見

無信の者に

与えたまえるなりと
知るべし」

ああ
法はナムアミダ仏

の外に田村実造、宮地廊慧、井上善右エ門、城一雄の諸先生が収集されて、心配は喜びに急転した。本当に御催しはかかるの外にある。富山の長谷顯性兄は電報で「ヨキオソツドイヲハルカニオロガミマツル」と欠席の知らせを下さつた。又武生の木村無相兄は風邪で欠席と速達便で、唯信鈔文意の中から、聖人の驚くべきお言葉を伝えて下さつた。「釈迦如來、よろずの善の中より、名号をえらびとりて、五浊惡世、惡世界、惡衆生、邪見、無信の者に、与えたまえるなりと知るべし」の御仰せであります。惡衆生とか邪見とか煩惱具足とかはよくお聞かせ頂くことで、まことにその通りであります。が、無信の者といふお言葉は全くはじめて聞く思いで、しかもそのものばかりで、このお言葉に遇うて息をのむ思いがいたしました、余りにも私を言い当てられたお言葉です……。

「不信」どころでなく、根こそぎ「無信の者」——全く無

機は惡衆生、邪見
無信の者——

ああ

無信の者

なんの信疑の力があろうぞ
ナムアミダブツ

右の無相兄の驚きの法悦を再三拝読して、御本典総序の

「……特に如來の發遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専ら斯の行に奉（つか）え、唯斯の信を崇めよ」とある仰せを思い出します。如來の行と信を我が手に握つて我のもの顔にするのでなく、これを奉（う）け、これをあがめよ、との仰せを思うのであります。無信の者に名号を与えたまうとの聖人の仰せに感動したことあります。

さて私の此頃の心は歎異抄第九章「念仏申し候えども跡歎歎喜の心おろそかに候こと」であります。三十一歳の秋にお念仏に遇わせて頂き、はじめて念仏が出たのですが、それからは鬼の首でも取つた心地で、ご縁のある所、到る所でお念仏一つを高く掲げて、無碑の一道そのもので走り廻つたのですが、三四年たつと、有難さも無くなり、一

日の内に何遍念佛が出るのかどうか、この頃は法然上人の

お言葉「寝てゐる間に死ぬこともあるので、床についてから眠る前にお念佛して寝る」という意味の御文を思い、それを真似ているのです。

本当に喜びも念佛も無くなつて元の木阿弥となつてゐる。禅でも無字の公案に参じて見性する、そして悟後の修行をする、長年月これを続けてゆくと、本当に悟りも喜びも無くなり、真の無に還る、ここで本当の無になると言います。第九章ではここを「よろこぶべきところをおさえてよろこばせざるは煩惱の所為なり、然るに仏かねしろしめして……」仏様はこの状態を十劫の昔からかねてお見抜きお見通されて「よろこばぬにて」と、お淨土へ参るまでは

それがお前の本性なのだったと仰言つて下さるのです。田村実造先生がかつて「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじころにてありけり」の仰せを、丁度、親子が電車を降りる時には、親の方が先きに「親鸞もこの不審ありつるに」と先きにおいて、そして「唯円房おなじころにてありけり」と子供を抱いて降りて下さると言われたことを覚えています。

ここで思い知らされますのは、聖人は「唯円房お前もうか、私もそうである」と仰言らないで「親鸞も」と常に御自身を打ち明けられて、その体験の中から仰せになるこ

とです。

又「淨土へいそぎまいりたきこころのなくて」淨土往生の道を歩ませていただきたい私のですが、それでは直ぐ連れて行くと言われたなら、一寸待つて下さいの私です。この私に「名残り惜しく思えども婆娑の縁つきて、力なくしておわるとき彼の土へはまいるべきなりいそぎまいりたきこころなきものをことにあわれみたまうなり」と、この私の姿を十劫の昔からかねてお見通しの本願であり、その願成就の名号で、私の底の底まで御承知の大悲大願がこの第九章で、身にしみて味わわされるのであります。

(編者追記)

刑が決定してから不思議に念佛を喜び、模範囚と云われた死刑囚が、いよいよ処刑の呼び出しをうけた時、「今日でしたか!」というなり真青になり、くずおれてしましました。その時篤信の教務課長さんから「いよいよとなると誰しも名残りはつきない、あきらめられんからこそ、仏様がごとに憐れんで下さる」と聞くなり「ああそうでした、ナムアミダブツ、ナミアミダブツ」とお念佛と共にわれをとりもどし、お札を云い、最後には白骨の御文を読み終つて刑についた。このことを思い出して書き添えました。

念佛詩抄

木村無相

いつでも どこでも

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ただ念佛は

これ一つ ただこれ一つで
通られる

生きるも死ぬるも

これ一つ

そのこれ一つ

いつでも どこでも
それ一つ

ナムアミダブツ

わたしがなんと
思おうとも
ただ念佛より
ほかないわたし

おわします

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ただ念佛は
さすかりもの
ただ念佛は
いただきもの

大悲の目

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

その日その日の
おりようげは
その日その日の
ソラゴトタワゴト
水に浮かんだ泡つつぶ

おりようげ

ナムアミダブツは
わたしを見る目は
わたしはわたしを
よう見ない
わたしを見る目は
わたしにない
ひいき目にしか
よう見ない

“ただ
念佛のみぞマコトにて
おわします”

ただ

念佛のみぞマコトにて

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

(編者記) おわび

昨年十月号の念佛詩抄の終りの「マチガイ」の第二偈か
らと、十一月号の「仏さまから」の第二の偈とをとんでも
ない間違いをしておりましたので訂正いたします。

マチガイ

あるひと曰く
“ちよつとでも
仏法の水に
つかつていて
思つたら
マチガイじや”

聞くときだけで
アトはカラ一
いつも仏法から
はづれてる

仏法の水のソトに
いる――

聞くときだけで
アトはカラ一
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
大悲の目

ある婦人――
“仏さまから
煩惱臭足の凡夫と
呼びかけて下され
ましたゆえ
何にも心配はいり
ませぬ――”

何にも心配は
いりませぬ
ただ
このままで――

隨想断片

花田正夫

実語と金言

先年亡くなつたアンドレー・マルローは作家であり、実行家であった。日本の美術にも深い理解をもつていて、世界にそれを紹介した人であった。彼の死は各界から非常に惜しまれているが、彼の特徴は、人類の文化を超時間的、超空間的な視野に立つて見ていた点である。そのことについて或人が質問したら、即座に「いつも死とたたかっているから」と答えたと聞く。

超時間的、超空間的視野について、人々は夫々に住む地域とその時代に束縛せられて、物を見、ものを考えているから場所に局限され、時代に左右せられてそれから超脱出来ない。明治の頃、高山樗牛が「吾人はすべからく現代を超越せざるべからず」と云つたのはその境界を理想としたる。仏語を金言とも実語とも讀えるのは、何時まで経つても錆（さび）の出ない、そして一度でも耳に聞き眼にふれると、決して消えて空しくなることのない生きた真実さを持つからである。

和國の教主、聖德太子が十七憲法に「篤く三宝を敬え、四生の衆福、万國の極宗なり。いずれの世、いずれの人かこの法を貴ばざらん、人はなはだ悪しき者はすくなし、よく教うればしたがう。それ三宝によりまつらずば何をもつてか枉（まが）れるを直（せん）」と、御自ら歸し、人々にも勧められたのは、太子の信眼に見出された仏陀の絶対眞実心への驚異と渴仰からであった。私は常に憶う、ここに到達された太子は、どんなにか深いおよろこびであったであろうかと。日本の将来と当面の打開に身心を削られた太子は、永遠の黎明、不滅の光を発見され、永く末代への灯炬を掲げて下さつたのである。かくて御家庭にあられてはいつも「世間虚偽、唯仏是真」と種々の問題に遭遇されることは身をもつてそのことを実証され常に語り続けて四十九年の生涯を閉じられたのである。

求道と顯現

足利淨円先生のお亡くなりになる前年にお宅を訪ねた時善財童子の求道の絵と讀を書いて頂いた。太くたくましい

のである。ゲエテは「或時代にあって、それを超えることは至難である」と時代の影響から出難い身を歎いている。

マルローは、これを超える道として、いつも死とたたかっていたのである。死を前にして、自分のつけた一切の着物を脱がされ、心の垢を洗われる、そうした所に立つ視野を大切にしたのである。特種な例であるが、芥川龍之介が「末期（まつご）の目にうつる自然是美しい」と、死を前に書いているのもこれに近い心境であろう。

さて、私共には超時間的、超空間的視野などは得られないけれど、それを完全に成就された方が、覚者にまします仏陀である。その無我な仏陀のことばは、何時までも古くならない新鮮さがあり、又地域に制限されないで、老少善惡のへだてなく、民族と国境を超えて、あらゆる人々に朝毎に仰ぐ黎明（れいめい）に等しい感動を与えるのであ

脚をした善財童子が、文殊菩薩に導かれて合掌しながら五十三の善知識をたずねて行く合掌の姿である。

その善財童子の知識には、船人、医師、童子、バラモン僧、遊女、暴君等々、さらに夜天の数々、終りにはお妃の嬰夷（くい）女、母后の摩耶夫人があらわれ、最後に善財は普賢菩薩に導かれて往生成仏されるのである。

善財求道の物語については、昨年お亡くなりになつた福島先生から講話と著書を頂いているが、その導きによつて、私共が本願を信じ念仏申しながら、身にもつ業道のままをたどさせていただく時、仏力の自然の働きによつて、障りを縁として、種々の教えを恵まれるのを通じて、童子の求道の姿を身近に味わうことが出来るようになつた。親鸞聖人は「大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮かびぬれば至徳の風静かにして衆禍の波転ず云々」と讀仰されている。和讀には、

罪障功德の体となる 水と水の如くにて
水多きに水おおし 障り多きに徳多し

と随喜していられる、和泉式部が愛児をじくして
夢の世をあたにはかなき世と知れと

おしえてかかる子は知識なり

と詠じ、蓮月尼は、
宿かさぬ人のつらさをなさけにて

おぼろ月夜の花の下ぶせ

と歎じ、良寛さんは、

おろかなる身こそなかなかうれしけれ

弥陀のちかにあうとおもえば

と、仏徳を讃仰していられる。

京都の禅林寺の永觀律师は、非常に聰明な方であつたが、身体が弱かつたので、单なる仏教学者になられず、御自身の生死出すべき道を求め専修念佛の仏法者となられ、「病もまた善知識なり」と言われたことも教えられることが多いことばである。

みとめられる喜び

私共が世に処して、自分が無視されることは非常に淋しい。もとよりこれと云つて取り柄のない身には、それも無理ないことであるが、才士とかやりてと云われる人にはその傾向がはなはだしい。

しかし、芭蕉が「見るもの花にあらずということなし」と云つて、山路に咲くすみれ、古池にとびこむ蛙、垣根に咲くなずな、岩にしみいる蟬の声に妙趣を見出しているのに驚かされるが、弥陀が「一切衆生悉く仮性を有す」と言われ、常不輕（じょうふぎょう）菩薩は「あなたも仏に成れる人である」と尊び合掌したとあるのも心うたれること

私は歎異抄を永年読ましめていただいているが、私のような愚悪な者をもおへだてなく、往生成仏出来る身といたるところに呼びかけて下さっていることの有難さにうたれる。ことに聖人はよろこべぬにつけ、よろこべるにつけ、その一人は親鸞なりと、私の煩惱の中にあらわれて下さり、微塵もおへだてのないことに胸うたれる。昔から「士はおのれを知る人のために死す」というが、御理解ある聖人のおこころ、それはそのまま釈迦、弥陀二

ともしび
わが弥陀は名（名号）をもつて物（衆生）を撮した
まう

（弥陀經義疏）

人は病や老いに身体の自由が制限せられるにつけ、言葉のあることの有難さがあらためて知らされてくる。地上の何處に住む人とも心の交流が出来、遠い昔の人とも書物を通して親しめ、また未来の人達にも働きかけることができるのは言葉のおかげである。それは時間と空間にさえられぬ広大無辺の世界である。

さて寿命無量、光明無量の阿弥陀仏が、私共を救い上げるために、その全分のお働きをおさめて名号、言葉となって現われて下さったことは、甚深のおぼしめしである。形あるものはすべて滅する、弥陀仏の本願をお伝え下さつ

である。

ギリシャの聖人ソクラテスは、人々が持つ眞実の智慧を引き出すことに専念し、自分は産婆術を施している、産婆は、立派な子の生れ出るのをたすけるのがつとめであるように、自分の仕事は人々に眞実の智慧の誕生する手だけををしているばかりだと云つて、師の礼は拒否している。

さて、この理解ある広大な仏心を仰いで、伝教大師は鷺の山、高根にのみとおもいしに

わが立つ袖（そま）に有明の月

と讃歎し、西行法師は

人も見ぬよしなき山の末だにも

すむらん月の影をこそおもえ

とたたえ、易行院法海師は

明らけきひかりを四方（よも）のかぎりにて

月のうちなる 武藏野の原

武藏野のチリチリ草の露だにも

身をほそめてぞ 月は入りぬる

と、自分の全体をひろいみこころにおさめ、更に煩惱のどんな小さい動きをもよく理解して下さることを隨喜していられる。

尊の心にかようものであるが、それにふれて、念佛して地獄であれ、淨土であれ、その結果に用事のない身にさせていただくのである。

人にみとめられるのでなく、弥陀にみとめられるよろこびは、人に向つてほこるものでもなく、又よろこびにつきまとう暗い影もなく、内からほほえめる、充実したよろこびである。

（完）

た釈尊も、高僧方もみんな入寂せられたけれど、御名一つはいよいよ光を増して、永遠に自在に働き続けて下さつてゐる。

また私共が絶対の仏に近づこうとするのは、竿をもつて星をおとそうとする児戯に等しいが、絶対の仏の方から、称えやすく持ちやすい名号とあらわれて下さったおかげで仏心と凡心との交流の道が開かれるのである。

さらに猿には個々の物体は見えても、赤とか青という抽象的なことはわからない。人間にそれができ、永くたもち人々にも伝え得るのは言葉のおかげである。私共は煩惱にかまけて仏様から遠ざかりすめであるが、名号のお力でたえず呼びもどされて憶念することができ、人々とともに喜びあえるのである。

あとがき

本年は地球の異変のような異状な寒波が続きますが、その中に米国も中国も日本も政権が變つてきました。然し西も北も日本丸の前途は波高いことであります。

こうした中に二月を迎え、福島先生の御一周忌となりました。まだ心の鈍い私には先生が亡くなられたという実感がおこりませんが、岡山の山田宰さんから先生追憶の文を頂きました。先生は教育学をおさめられ教育者としての生涯を歩まれたのですから「教育の姿」の一文を掲げ皆様と御一緒に入りその真意にふれさせていただきましょう。福島先生のお歌に、この道やというの

が二首あります。

この道や誰か辿りし遠じろく

ひかりみなぎる永劫の道

斯の道やわが辿る道そのままに

國の力となりぬべき道

であります。日本の教育の現状を非常に憂いられながら、日本に発達して立派に

開花した家庭教育の御著書を最後に著わされて淨土にかえられました。今や宝林壇上にあって御照覽下さり、護念くださることを信じます。

福島先生は、近角先生に開眼せられ、の

ち曰杵祖山先生を母のようにお慕いになりました。兩先生のお原稿も掲げました。

一一道会の記は早くから榎原師から頂いておりますが、誌の都合で順次にいただきま

す。年一度の京都の一道会を、私共の報恩講ですといつも仰言つて、大変な苦勞をも喜んで引受けて頂いてきましたことは、頭

が下るばかりであります。池山先生がお亡くなりになつてのちに、御命日に自然に有

縁の者が集りはじめましたが、年を追うて急仏の輪がひろがりますことは本当に不思議なそして自然な仏力の御催しであります。

木村さんは二月二十日で満七十三歳、「一

私、こんなトシまでも生きられるとは思いいませでした。父が昭和三年夏に、瀬戸の撫順炭坑で死んでいたそうですが、その父の五十七まで生きられたら上等と思つていつたのであります……」と。

○木村さんは二月二十日で満七十三歳、「一私、こんなトシまでも生きられるとは思いいませでした。父が昭和三年夏に、瀬戸の撫順炭坑で死んでいたそうですが、その父の五十七まで生きられたら上等と思つていつたのであります……」と。

八御案内▽

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜

午後一時半。南区駒上町二の八八、市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、

新端橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小桜町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

○名古屋市南区駒上町二ノ八八、名古屋市南区駒上町二ノ八八、電話八二一局七〇三七番

編集・发行人 花田正夫

定価 半年 七〇〇円 (送共)
一年 一四〇〇円 (送共)

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
名古屋市南区駒上町二ノ八八

印 刷 人 坂 部 光 雄
振替口座 名古屋 一〇四七〇番

發 行 所 慈 光 社
京都市下京区堀川通花屋町 百華苑

池山先生著書の御紹介
意訳歎異鈔 定価 五〇〇円 送料三円
佛と人 定価一五〇〇円 送料三円

京都市下京区堀川通花屋町 百華苑
振替口座 京都二五七八八番